

令和 7 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名 : あお空グループホーム小本

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0393000070		
法人名	有限会社 介護施設あお空		
事業所名	あお空グループホーム小本		
所在地	〒027-0421 岩手県下閉伊郡岩泉町小本字南中野285		
自己評価作成日	令和7年8月12日	評価結果市町村受理日	令和7年12月19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

事業所理念の『ありがとう』という感謝の気持ちを言葉で伝えるように心掛けている。季節毎に行事を企画し飾りつけを行っている。馴染みの果樹園でサクランボ狩りやブルーベリー狩りを実施。近所の農園からお裾分けの野菜を頂きに職員と一緒に出向くなど地域交流を心掛けている。普段より散歩や畑・花の世話・水やりを日課に取り入れ、屋外に出て気分転換が出来ている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所には法人が運営する小規模多機能ホームや高齢者アパートが併設され、三陸鉄道岩泉小本駅より徒歩数分、三陸縦貫道の岩泉龍泉洞インターチェンジからも近く、周辺は、民家やスーパー、コンビニなども徒歩でも移動できる場所にある。一方で、津波や洪水の浸水区域内にあるために、高齢者避難準備情報などがあれば、指定の避難場所へ避難する必要が生じるが、町の仲介で周辺にある企業と災害時の協力協定を結び、避難の際に周辺の協力が得られる態勢ができています。また、ご近所の方々から、野菜などのお裾分けをいただいたり、地元で開催されるイベントへ積極的に出かけるなど、地域との関係性が良好である。事業所では、時々、入居者の馴染みの関係のあった商店などヘドライブの際に立ち寄るなど、入居後も引き続き関係性が途切れないように工夫している。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和7年9月16日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる(参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている(参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある(参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている(参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている(参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている(参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている(参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている(参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている(参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている(参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている(参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

[評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : あお空グループホーム小本

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	昨年作った事業所独自の理念は理解している。理念に有る『ありがとう』の言葉が聞かれるようになっている。確実に実践につなげることが出来るよう努力している。	法人としての企業理念の他、事業所独自の理念を定めているが、状況を見ながら理念の見直しをしている。現在の「ありがとう」～気持ちと笑顔を届けましょう～は、昨年見直しされたものであるが、入居された方がよく発していた「ありがとう」の言葉を引用したもので、入居者や職員の間で意識的に使われ、浸透している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	地元のお祭り(七つ舞)見学や納涼会の参加している。お祭りでは事前に連絡を取り合い席の確保等便宜を図っていただいている。地域の部落会に登録し情報交換している。	運営推進委員に地元の自治会役員が加わっていることから、地域内で開催されるイベントがあれば、お誘いがあり、観覧場所等の配慮をもらっている。また、地元の農園や近所の方から、農作物、海産物などのお裾分けをいただくことがあり、受け取りに入居者と出向くこともある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	積極的に実践が出来ていない。認知症についての相談等を受ける体制は出来ている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている。	運営推進委員は包括支援センター・支所長・部落会長・社会福祉協議会支部長など多様な人材で個性されている。業務報告のほかにも問題ケースの相談を行う事もある。	会議は、隣接する同法人が運営する小規模多機能ホームと合同で開催している。地域内の心配事なども話し合われる機会にもなっている。入居者は、本人が希望すれば出席可能である。また、家族には、事前に出席案内をしているが、遠方などの事情から出席に至っていないことが多い。会議終了後は、家族や委員に報告書を送付しているほか、希望があれば、閲覧も可能な状態にしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる。	市町村担当者は運営推進委員として会議に参加している。メールやテレビ電話を使い、施設の空き状況の問い合わせや事務連絡・相談を行う体制が出来ている。	町の支所長と地域包括支援センター職員が、運営推進委員となっており、行政機関との連携が図れている。また、地域包括支援センター主催の地域ケア会議には管理者が出席し、事業所の実情を伝えつつ、地域内の課題に対して提言などを行っている。	

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : あお空グループホーム小本

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	身体拘束廃止実行委員会は毎月開催し定期的に研修会を行っている。身体拘束を行う事例は無い。	毎月、都合のつく職員が出席する形でミーティングが行われているが、その際に委員会を開催している。身体拘束の有無や、身体拘束に繋がりそうなケースがあったかどうかを確認し、振り返りの機会としている。年2回程度、担当する職員が企画して研修会も開催している。出席できなかった職員は、後日、会議記録を確認することとしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	虐待廃止実行委員会は毎月開催し定期的に研修会を行っている。虐待の事例は無い。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	職員は社外研修に順番で参加し、制度について学習し支援に活かしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	入居申し込み時に簡単に説明をしている。契約締結時は書類を読みあげ、その都度質問に応じ理解できるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	定期的に作成する『介護計画』を確認していただく際や帰宅時・面会時に家族の意見を聞く様に心掛けている。聞き取った意見や要望は職員間で話し合い反映できるように努めている。	年4回、季節毎に広報誌を発行している。家族等への配布に併せて、入居中の様子をメッセージとして、各入居者の担当者が記入し送付している。面会や外出でご家族来所の際や、ケアプラン見直しの際など家族からの要望、意見を聞き取りをしている。入居者からは、日々の関わりから把握をしており、申し送り、ミーティングの際に共有、検討されている。	本外部評価に係る家族等アンケートにおいて、入居者本人の状況等が「わからない」と回答された項目が複数ありました。入居者の生活、活動の様子がより一層家族に伝わるよう情報発信について工夫されることを期待します。

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : あお空グループホーム小本

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	就業規則変更時等に代表者から届いたアンケートや回覧文用を職員は確認している。日頃の業務や運営への意見は管理者が申し送り等の機会を利用し聞き取り、本部へ提案している。	毎月、職員ミーティングを開催し、その際に職員からの意見を聞き取りしている。出された意見の内容が、事業所内で解決できる問題については、その場で検討し適切な方策を講じている。例えば、オムツの装着方法について外部の講師を招いて実践研修を取り入れるなど、事業所内での解決が難しい場合には、管理者が法人本部と相談して解決している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	代表者と直接話す機会がほとんどない。勤務状況や資格に応じて処遇改善手当が支給されている。資格取得に必要な資金を貸し出す制度があり、利用実績もある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	外部での研修機会は少なくなっている。職員の出来ない事や出来ている事を把握し、職員同士で技術を高めれるように機会を作っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	グループホーム協会に加入し、研修会や親睦会等に参加している。町内の事業所や系列の事業所を訪問し合い、サービスに活かしている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	サービス導入前にご本人と面接をし要望や不安等を聞く様に務めている。担当する介護支援専門員や家族からも情報を集め、安心して利用開始できるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	利用申込の際に家族から要望等を聞き取るようにしている。サービス導入前にも、本人・家族の不安や困り事を聞き取りしている。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : あお空グループホーム小本

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	利用前に得た情報を基に職員は必要な支援を話し合い共有している。入居後も必要な支援方法を職員は話し合い、対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	出来る仕事はその人の『役割』として協力していただく。利用者同士で教え合っ仕事をすることもあり、職員は、やる気を損なわないように表情や様子を見ながら声掛け誘導している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	家族との関りの少ない利用者もいらっしゃる。遠方の家族の場合は、電話での交流や定期的に発行する広報で、担当者から様子を伝える手紙を添えて届けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	在宅の時に有った、行きつけの商店にドライブの途中で立ち寄る事が有る。馴染みの関係者も交流を継続することが難しくなっている。	管理者が入居前の家庭訪問において、一人一人の馴染みの関係の把握に努めている。その情報を基に、ドライブに出かけた際には、その方の馴染みの場所にも立ち寄ったりしている。近所のスーパーへの買い物や2ヵ月毎に訪問する美容師、近所の理髪店なども馴染みの場所や方々である。鮭祭りも馴染みの地域行事として、思い出が途切れない様に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	利用者の性格や身体状況を把握し、関わり合えるように食席の工夫をしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	サービス終了後(介護支援専門員がいない場合)も支援は継続している。サービス終了後2年以上経過したご家族が相談に来る事が有った。		

事業所名 : あお空グループホーム小本

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	日々の暮らしの中で、職員は思いや意向把握に努めている。把握した事はミーティング等で共有し、本人の望む暮らし方に近付けるようにしている。	現在の入居者は、自発的に意見を述べる方が多い。入居者が発した言葉を記録し、毎日の申し送り等で共有した上で毎月のミーティングで検討、対応している。入居者から髪を伸ばしたいという要望があり、そのためには髪を結う必要に迫られ、男性職員を含めた全ての職員が髪を結えるように練習し、できるだけ利用者の要望に添えるように工夫を重ねている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	ご家族や担当していた介護支援専門員・認定調査時の資料等から情報収集している。日常の会話や昔話の雑談の中から情報集に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	一日の過ごし方や体調の変化は記録に残し、変化の把握に努めている。日々の中で気付いた『出来たこと』『困難だったこと』は申し送りやミーティングの機会に職員間で把握するように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	ミーティングの際に利用者の変化や課題・課題解決案について話し合っている。	入居時に計画作成担当者がアセスメントを行い、それに基づいた介護計画を作成している。計画内容は、全職員が毎月モニタリングを行いながら、毎月のミーティング時に確認している。3か月毎もしくは状態の変化が顕著な場合には、担当者によるアセスメントを行った上で計画の見直しが行われている。計画は、家族が来所された際や電話にて説明を行い、了解をいただいている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	ケース記録や業務日誌に様子や変化を記載、申し送りノートを活用し情報共有している。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : あお空グループホーム小本

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	必要なニーズに対しては、柔軟に対応できるよう取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	地域支援を活用し暮らしを楽しめるように努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	かかりつけ医による訪問診療を利用している、診察には看護師や職員が付き添い医師への情報提供や指示の聞き漏らしが無いようにしている。それ以外の病院受診の際は施設での様子や体調の記録等の情報提供をしている。	ほとんどの入居者が、協力医療機関である済生会岩泉病院をかかりつけ医とし、月2回の訪問診療を受診している。体調の異変があった場合には、電話相談を経て入院などしている。その他の医療機関を受診する方については、家族対応となっており、生活の様子やバイタルなどが記載された書類を手渡し、主治医が日常生活の様子がわかるようにしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	バイタルチェックや排泄・水分補給量を記録用紙で管理し、気づきや変化は看護師に申し送りし、適切な看護につなげられるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院に対し『入院時情報提供書』を作成し提出している。		

事業所名 : あお空グループホーム小本

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	重度化した場合に、事業所が出来る事・出来ない事を家族には伝えてある。かかりつけ医・訪問看護・かかりつけ薬局との連携は出来ている。	原則として、グループホームの体制の都合で、終末期の対応は行っていない。体調の異変があった場合には、協力医療機関に相談の上、入院などの措置をとっている。入院中に重度化する入居者が多く、入院期間が3週間以上を経過し、グループホームでの生活が難しいと判断された場合には、介護老人福祉施設等への入居の申込みを勧めるなどしている。	終末期の対応について、様々なケースが想定されることから、職員に対する研修や指針等の作成など、法人内の系列事業所の取り組みなどを参考にしながら、事業所としての体制を整備されることを期待します。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	社内研修で学習し、実践の際に活かせるように努力している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	初災の際に地域協力を受ける体制が出来ている。隣接する事業所と協力しながら安全に避難できるように訓練を行っている。	グループホームのある場所は、洪水や津波等の浸水区域内にあるが、近隣の企業2社と指定避難場所への移動時に協力いただけるよう協定を締結している。また、小高い場所にある会社の社員寮を二次避難所とし、3日分の食料等が備蓄されている。年3回、避難訓練が計画され、うち2回は火災想定、1回は水害想定で運営推進会議のメンバーの参加も得て実施している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	利用者様が積み上げてきた経験からくる誇りやプライバシーに配慮した対応をするよう心掛けている。	入居前の調査の際に、利用者本人の生活歴や得意なこと、趣味などを確認することで、本人の人格の尊重や本人の持つ能力を活かした対応を行っている。入浴や排泄誘導、介助の際も、できるだけさりげない対応を心がけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	ご本人の希望を考え、可能な限り自己決定を尊重したケアを心掛けています。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	その人らしい生活を維持できるように支援を行っています。本人の生活リズムに合わせ無理せず本人のペースに有った支援をしている。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : あお空グループホーム小本

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	自分らしいオシャレを楽しめるよう支援している。散歩や外出の際は身だしなみチェックやヘアースタイルを整えている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	季節や行事に合った食事を楽しめるように、バランスを考えた食事を提供している。野菜の下ごしらえやすいとん作りを一緒に行っています。	食事は一部冷凍食品を使っているが、特に献立は決めていない。自家菜園で栽培した野菜やお裾分けでいただいた物などを利用者に見せ、調理方法などを聞きながら、一緒になって作ることもある。行事や季節に応じて、できるだけ無理のない範囲で、工夫した物が提供されている。誕生日には職員と外食を楽しむこともある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	毎食のメニューや残食・水分量を記録し栄養摂取状況や嗜好の把握に努めている。食欲低下の時は、本人の嗜好に合ったものを提供する努力をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	毎食後の口腔ケアを実施し仕上げ磨きや舌苔の洗浄を支援している。就寝時は入れ歯を洗浄剤で除菌している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	日中や就寝時は利用者のタイミングに合わせ、声掛けを行いトイレでの排泄できるように支援している。	トイレは1階に2カ所、2階に2カ所あり、日中は、半数以上の入居者が自分でトイレに行き、声掛けや付き添いは数名の方だけとなっている。介助が必要な場合でも、トイレは余裕のある広さが確保されている。排便時の確認が行われており、適宜対処できるようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	排便の有無を記録し排便状況を把握している。毎朝牛乳を提供し散歩や花壇の手入れ等で歩く機会を作っている。便秘の際は看護師と相談し薬に頼る事もある。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : あお空グループホーム小本

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている。	週2回入浴の機会を設け、入浴の曜日の決まりを作っていない。自分のリズムで入浴できるように職員と一緒に準備を支援し、入浴の始まりから終了まで1人の職員が対応する。	月曜日から土曜日の午後に入浴の時間を設けている。原則週2回としているが、皮膚の状態などで足浴や入浴が必要な場合や、本人の希望にも応じて対応している。それぞれの利用者の状態に応じて、シャワーチェアや可動式の手すりなどを使って、入浴がしやすいように工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	快適な睡眠環境を得られるように、日中の活動量や個々のリズムに応じて休息をとっています。夜間はその人に合った寝具や室温調整を行い安心して眠れるようにしています。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	医師の処方に基づいて薬の管理をしている。『お薬説明書』を確認し副作用や飲み忘れが無いように繰り返し確認をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	役割や楽しみを感じ、無理なく取り組める活動を提案している。個々の興味に応じた活動を支援しています。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。 又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	外の空気や季節を感じられる様に散歩やドライブ等沢山外に出る機会を作っている。付き添いや車椅子使用の場合も安全を確保し、外出サポートをしています。	天候が良ければ、周辺の散歩に出かけている。また、近所のスーパーへの買い物や、農作物をもらうため地域の農園へ職員と一緒に入居者が出かけている。また、月に1回程度、季節に応じて花見やサクランボ狩り等へドライブで出かけており、管理者は、衣装などの身だしなみを気にする入居者が多いとしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	現在は現金を所持管理している利用者はいらっしゃらない。少額を施設で預かり必要に応じて使えるようにサポートしています。出来る限り本人の希望に寄り添い購入したり、一緒に選ぶこともあります。		

令和 7 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : あお空グループホーム小本

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	携帯電話をお持ちの方は、家族と連絡が取り合えるように充電量の確認を行っている。施設の電話やピーちゃんねっと(テレビ電話)を使い連絡を取り合えるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	季節の花や飾り物・趣味活動で作った作品を展示している。共用空間は整理整頓し、清潔に使えるように心掛けている。	1階が共有スペースとなっており、リビングや食堂として入居者と職員と一緒に過ごせるスペースとなっている。その時々をイメージしたものを、職員が主導して入居者とともに作ったり、梨、柿、ブドウなど季節の果実を模した装飾作品が飾られている。事業所周辺は、民家が多くあるが、外から中が見えにくいように反射ガラスが使われ、プライバシーも確保されている。観葉植物なども配置されており、手作りのジェンガで楽しんだりテレビを見たり思い思いに落ち着いて過ごせるように努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	ソファを設置しくつろぎ空間を作っている。玄関先にベンチを置き外を眺めたり一人になれる空間作りをしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	全室一人部屋。ベッドや家具の位置を使いやすく配置している。家族との写真やカレンダーを壁に貼り、自宅らしさを表現している。入り口を解放している部屋には、のれんを取り付けている。	2階に居室が9部屋あり、居室内には電動ベッド、チェスト、クローゼット、エアコンが完備されている。テレビを持参すれば、設置も可能である。本人の思い出の写真や、家族の写真など持参して、飾っている利用者もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	自分の部屋やトイレの位置が分かるように名札を取り付けている。衣類や自分のものがわかる様に記名し自分で整理整頓できるようにしている。		